

# 世紀の歌姫

グルベローヴァは「100年に2,3人しか出ない真の歌手」と表現されることが多い。現在のオペラ界でトップというのではなく、過去を遡っても数人しかいない、複合的な芸術性を持っているのである。それでも、ウィーンでベームに見出されるまでは苦勞を重ね、今でも当時の思い出話をする時には、温かな彼女が感情的になってビックリさせられる。しかし、だからこそ、長い歲月トップであり続けられ、デビュー40周年を迎えても未だ、停滞を知らないのだろう。

「まず初めに声ありき」だが、グルベローヴァは神様に与えられた美声を大切に続け、感情的にはピッタリくる役柄があっても、歌ってみて自分の声帯に負担をかけると感じれば、潔くあきらめてきた。例えばノルマだという。何年もかけて準備し、声帯の成熟度がノルマの欲する声に達した時に初めてデビューを決めた。それも、初役のナーバスさを支えてくれる温かい日本の聴衆の前で初めて歌う、と決めていたと言う。それが2003年の演奏会形式『ノルマ』だったのである。時には我が子とも筆談するような時期もあった。皆が認める彼女の美声も、そうした節制のお陰で今なお瑞々しく響いているのである。

コロラトゥーラの技術も完璧であるが、その域に達すると、技術を誇示することに走ったり、完璧を求めるが故に感情が伴わないことが多い中、彼女の歌い直しには常に血が通っている。「どんなに短いフレーズを歌う時でも、彼女は自身が納得いく表現を追求している」と共演を重ねている指揮者達は断言している。今回のリサイタルは20年来の共演で数々の成功を収めてきたラルフ・ヴァイケルトが指揮するが、グルベローヴァが『自分の居場所』と認識するベルカント・オペラのプログラムの前に、モーツァルト・オペラのアリアが含まれているので、指揮者も楽しみにしているらしい。

グルベローヴァはモーツァルトに特別な畏怖を抱いているようだ。5月にルツェルンで行われたリサイタルの2週間前も、「これから又、モーツァルト歌曲を練習しなきゃ」と、なかなか出来映えに満足していなかったようだ。モーツァルトを歌う時は、まるで卒業試験のような気分になるのだという。その彼女が選んだ『イドメネオ』と『ドン・ジョヴァンニ』からのアリアは、きっと現在の彼女にピッタリの曲なのだと思う。『後宮からの逃走』のアリアのレッスンを聴講した時も、言葉さばき、フレージング、声の色、細かい部分すべてを感じ取って、お手本を見せる彼女のコンスタンツェは、水をたたえたような色気と若さのある魅力的な女性として、そこに存在していた。

とにかくグルベローヴァは完璧主義者なのだ。音楽以外でも勉強家で、イギリスの歴史に興味を持つと、自分で勉強し始め、そのお陰で、『ロベルト・デヴェリュー』でイングランド女王を歌う時にも人物像を身近に感じられたという。ルツェルンでのコンサートでは、淡い水色のマーメイドラインのドレスを

中東生  
(音楽ライター・在チューリッヒ)



『ノルマ』（バイエルン国立歌劇場）

着ていて、歩くたびに揺れる裾が華やかなのに、「もうあの服を着るには歳だわ」と批判的だ。環境問題も危惧し、「最近の世界はまるでポンペイの最後の日々のようなだわ。と言っても、私は自他共に認める悲観主義者なので、もう20年程前から、世界の終わり、と思っていたけれど」と笑う。

彼女はまた、熱心な美術収集家でもあり、自宅はさながら美術館のようだ。オーストリア人の著名な画家、エルンスト・フックスがお気に入り、ヴィオレッタや夜の女王を演じている彼女の大きな肖像画が特別な空間を作り出している。その他の絵画や彫刻に並んで、広重の浮世絵までも大切に飾られているのは意外だった。クロークなど、特別に横長の浮世絵をひきたてるために設計されたそうだ。芸術、学問全てからインスピレーションを受けて、彼女の表現が織り成されているのであろう。

ヴァイケルトは、彼女のような真のベルカント歌手がいる場合のみ、ベルカント・オペラは上演されるべきだと言う。その数々の役の中でも一番印象的だったのは、チューリッヒ歌劇場で長い間再演され続けていたロバート・カーセン演出の『ルチア』で、さきほどまで楽屋で多少だらけている態度すら見せていたグルベローヴァが、一旦舞台上上がると、特に狂乱シーンなど、恐ろしいほどの集中力を発揮し、観客が息をしていないのを背中で感じ取って、鳥肌が立つ



『ナクソス島のアリアドネ』  
のツェルビネッタ  
(ウィーン国立歌劇場)

たという。反対に、2005年には『セビリャの理髪師』を共に録音し、エコー賞を受賞している。今から40年前にこのオペラでデビューし、その35年後に同じ役を、賞を与えられるほど歌いこなせる、という歌手が他にいるだろうか。この喜劇では彼女のコケティッシュな演技も冴えていたというから、これほど両極端の役を演じきれるのは、彼女のずば抜けた表現力、演技力を証明していると言えよう。コケティッシュといえば、ベームに「シュトラウスに聴かせてやりたかった」とまで言わせ、彼女が一番好きな役だというツェルビネッタでも、メランコリーを含んだコケットは独特だ。これもまた、35年間歌って来て、9月には自称「最後の」ツェルビネッタをウィーン国立歌劇場で歌ったばかりだ。ファンとしては、気が変わってくれることを望むばかりだが。

その演技力の前では、年齢すら無効になるように感じる。現に、30歳代半ば

を過ぎ、2人の娘の母親になった後でも、『ヘンゼルとグレーテル』のオペラ映画のオファーが来て、立派に子供を演じきったと、多少自慢気に話してくれた。

ヴァイケルトとの共演は、最近では、チューリッヒ・トーンハレでの2007年シルベスター・コンサートをはじめ、エッセンのフェスティバルやハイデルベルクの春祭りなどと重なっているが、アムステルダムでは、コンセルトヘボウの舞台に続く長い階段を、毛皮をあしらった衣装で降りて来たその姿は女王そのものだったという。そして歌い始めると、観客の心をわしづかみにした。そのコンサートはテレビ中継されていたが、感動し、総立ちになった観客の拍手がおさまらず、25分も他のプログラムをおして放映され続けたそうで、それはオランダではサッカー中継でのみ許されるテレビ界のタブーだったらしい。それほど世界を熱狂させるグルベローヴァが、又日本で、神話を更新するのであろう。